

失い、遂ニ発病ニ至リタルモノニシテ、全ク公務ニ起因セルモノト認ム。

右証明ス

昭和十八年五月八日

私の十八歳〜十九歳の若き青春の一頁です。

—あとがき—

大湊海軍病院転送のさい、つきそっていたいただいた軍医、また被囊を持ってくれた同僚、大変にお世話をかけました。しかしそのご、この「薄雲」は北方の海に眠ることになり、運命をともしたと思われます。

心からご冥福を祈り、涙と共にこの筆を置きます。

## 潜水中の潜水艦

愛知県 今泉 一郎

二十年大戦末期ごろ、とくにサイパン、沖縄陥落後の豊後水道から外洋への出港は、潜水艦以外は不可能であった。

二十年五月、警戒任務で数百キロ沖の太平洋を巡航、

敵機の来襲にそなえ急速潜航にそくおうできる態勢での二時間交代二直制での当直勤務である。しかも潜航時は非常ベルとともに総員配置で、睡眠不足の連続であった。

もちろん甲板に上がり外気にふれ、また太陽をみることはなく、昼夜の別も時計で知るのみである。電機の制御盤前は四十度を超える高温と熱気、兵員室は天井から水滴の落ちるほどの湿度。汗を拭く水にも制限を受ける小さな潜水艦である。内地の漁港へ仮泊、民家の奉仕により入浴したときは、生還した思いであった。

六月、奄美大島への物資輸送作戦中、米潜から魚雷攻撃を受けたが、艦首と艦底をくぐりぬけ、さいわいにもぶじを喜んだ。その場の敵探知機をのがれるため全機停止しての無音潜航である。人の移動によるツリム調整等直接の戦闘ではないものの、日没までの長時間待機という地味な戦いながら感慨深いものがある。

大島へ入港したが米軍機のかんだんない飛来、空襲を避けるため、昼間の長時間海底へのちんぎ、潜航である。これもまた容量制限による酸素欠乏で肩で大きく呼吸す

る状態で、おかにあがった魚とまったく同然、空気のおりがたさをしみじみ味わった。

暗夜に乗じてせまいハッチから手送りによる陸あげ作業もなかなか大へんなものだった。

帰路、数人の帰還兵の面倒をみながら無事呉へ入港した。

七月中ごろ呉大空襲のさい、沖あいへ避難潜航したが、敵艦載機による投下爆弾がはれつし、振動と水圧等により艦内照明灯が断線、消灯、プレート鉄板のはねあがり、一部漏水等で生きたこころはなく、ひたすら安全を神仏に祈るのみである。

八月六日広島原爆雲もこの目で眺め、艦内でも気圧の瞬の変化があった記憶がよみがえってくる。八月下旬復員時に、自決用の青酸加里（カプセル）二錠を「日本軍人として恥ないよう、またあやまりのないよう」注意され、持ち帰った記憶も忘れ難いものである。

復員後、艦船引渡しの米軍指示により佐世保港まで回航のため再度召集の命があり、最小限の乗員でふゆう機雷に神経をとがらせながら、鹿兒島沖を通過して目的地

の佐世保に入港した（僚艦の触雷沈没を耳にしている）。その後数か月、引きわたしまで缶詰状態であった。その間保守任務をおこない、愛艦とわかれを惜しみながら帰郷した。

軍歌と小旗で送られた派手な出征時にくらべ、迎える人影もなく、捨て猫のごとく淋しい実役六年半余の帰還兵であった。

## 一等輸送艦九号の奮闘

長崎県 宮下政司

弱冠十五歳の身で帝国海軍に志願、昭和十九年二月五日横須賀海軍通信学校に入隊、新兵教育を終え、同校の第四期普通科電測術練習生を六か月で卒業した。同時に派遣中のまま佐世保海兵隊に入団した。

入団するとまもなく、呉海軍工廠で完成間近の一等輸送艦九号に乗組を命ぜられた。非常時とはいえ、諸訓練もほんの数か月で甲板上には重い甲標的（人間魚雷）を